

福島第一原発をどうするか

1. 今のまま「廃炉」の困難性（デブリ取出しと建屋の解体撤去）

- (1) 格納容器内部の高い放射線量（80 Sv/h）⇒ 電子機器類×、ロボット使えず
（福島原発事故から10年が経過して、デブリの存在形態や格納容器内部の様子も不明）
- (2) 遠隔操作の困難性と危険性 ⇒ 放射能の環境への拡散、被ばく労働の増大
- (3) 膨大な量の放射能汚染廃棄物の発生 ⇒ 処理処分の見込み立たず
- (4) 核燃料デブリを取り出して、それをどうするのか？ ⇒ 現場に置いておくしかない
- (5) 巨額の費用負担（デブリ取り出しだけで1.37兆円）⇒ 税金＝被害者救済に回せ

2. できもしない「廃炉」の危険性・欺瞞性

- (1) 二次災害の可能性大 ⇒ 大地震・大津波が再び襲えば大災害になる
（「格納容器を水で満たす」案は不可能を認識、格納容器に「穴をあける」案＝危険）
- (2) 環境への放射能放出は今でも続く（1,000万Bq/日？＝詳細発表せず）
（大気中への放出、海への放出＝地表経由、地中浅い部分経由、大深度地下経由海底湧水）
- (3) 大量の汚染水が発生し続ける ⇒ 全量海水で薄めて海洋投棄を計画
- (4) 無理を承知で強行すれば「大事故」の可能性大 ⇒ 再び放射能汚染と避難と賠償
- (5) 汚染水海洋投棄の口実（廃炉のためのスペース確保など）＝本末転倒
- (6) 廃炉は福島県民のためではなく原子カムの食い扶持稼ぎ（当面8兆円）
（原状回復を願う福島県民の願いにつけ込んだ卑劣な対策＝費用は「青天井」）
- (7) 「廃炉計画」の延期・修正を繰り返す無責任、根拠のない計画（絵に描いた餅）

3. 福島第一原発を「石棺化」せよ

- (1) チェルノブイリ原発と同様に事故原子炉を強固な建造物で隔離遮蔽する
（ねらいは、①二次災害の防止、②放射能のこれ以上の環境拡散防止、③被ばく労働縮小）
- (2) 汚染水対策は元GE技術者の「佐藤暁方式」（事故原発の周囲に巨大な堀を掘る）
（汚染水の原子炉建屋地下への流入の防止＝汚染水発生を止める）
- (3) デブリの水冷から空冷への移行と再臨界対策（監視と「もしもの時」対策）
- (4) 青天井の予算（税金）、膨大な量の放射能汚染ゴミ、被ばく労働、汚染水発生せずへ
- (5) 放射線被曝を強要する危険な帰還政策をやめ、避難・移住した方々への万全の賠償・補償・アフターケア（ホットパーティクルを軽視するな！）

4. 歴代政権・政府の態度

「国として「石棺」で処理するという考え方はいっさいない」（2016年経産相）